

弘前学院大学ティーチング・ポートフォリオ

看護学部・看護学科
宇田 宗弘

作成日 2024年1月31日

1. 教育の責務

2014（平成26）年に弘前学院大学看護学部採用され、2024（令和6年）で11年目となる。この間、看護学部では基礎演習、人体の機能Ⅰ・Ⅱ、ヘルスアセスメント、卒業研究、看護学部と文学部の一般教養科目である生物学（生命の科学B）、社会福祉学部と文学部の科目であるヘルスサイエンス論を担当している。				
2023年度担当授業				
科目名	学年	授業種別	開講学期	概要
人体の機能Ⅰ	1年	講義	前期	主に生命を維持する働き（植物機能）を学習する。
人体の機能Ⅱ	1年	講義	後期	植物機能とともに、運動・調節をする働きである動物機能を学習する。
生物学（生命の科学B）	1～4年	講義	前期	近年の生物学・生命科学を理解するための基礎的素養を養い、最近の医学や医療・健康に関わる生命科学について学習する。
ヘルスアセスメント	1年	講義	後期	フィジカルイグザミネーションの基本的技術を学習する。
ヘルスサイエンス論	1～4年	講義	後期	主に身体活動と体力・栄養・休養の視点から、健康の保持増進について学習する。
基礎演習	1年	演習	前期	各自設定したテーマについて、調べて、要約し、レポートを作成する。
卒業研究	4年	論文指導	通年	論文の作成方法を学習する。

2. 教育の理念

各学生の知識と知識をつなげて論理的に考える力や知識を活用する力を育成すること、またコミュニケーション能力の育成することを目標としている。これらの能力は学部学科の違いにかかわらず、社会全体が予測困難である現在において、変化や想定外の出来事に対する適応力や対応力、多様な場で多様な対象者のニーズに対応したり、新たな問題を発見し、それを解決したりするための基礎となる能力である。

このような教育についての基本的な考えのもと、看護学部では、生理学の基礎知識の修得と、グループでのディスカッションを通して、得た知識を用いて患者の状態を推測できる基礎的能力の育成を目指している。

また文学部と社会福祉学部では、生物学（生命科学）や健康科学の基礎知識を修得と、健康について情報が氾濫している現在において、正しい情報を取捨選択したり、得た知識を健康の保持増進に活用したりできる能力の育成を目指している。

3. 教育の方法

1. チーム基盤型学習、反転授業（グループでのディスカッション）

ある課題に対して、一人で調べて、発表することに抵抗がある学生もいることから、各自が調べてきた内容をグループ内でまとめ、最終的にグループで発表する。グループ内で調べたことをまとめることにより、自分以外の学生が、課題について、どのように調べ、勉強してきたかが分かる機会を設けている。またグループワークにおいて意見や考え方の違いを経験することで、学生のコミュニケーション能力を育てる機会となる。

2. ピア評価

グループでのディスカッションに関して、教員が提示した課題について調べた上でグループワークに参加しない学生の評価が低くなる仕組みである。これにより学生の事前学習を促している。

3. レポート課題

学生は説明を聞いたときは理解していると思っているが、後日、確認すると理解していないことも多い。したがって、教員としては理解しているのかどうかを確認するためにレポートを課している。またレポート課題が事後学習になるため、知識の獲得と知識と知識をつなげて論理的に考える力の育成に役立っている。提出されたレポートはルーブリックで評価し、理解していないことを明確にするためにコメントを書いて学生に返却する。レポートの評価が低い学生には、コメントに書かれたことを修正して再提出させ、そしてレポートの再評価を行う。

4. 穴埋め式授業ノートを用いた授業

重要な内容の箇所を穴埋めにした授業ノートを作成し、記述させている。単に授業を聞くだけでなく、重要なところを記述させることで、知識の獲得を促している。

4. 教育の成果

グループでのディスカッションは活発に行われており、提示した課題について調べてきた内容をまとめ発表している。またピア評価についても、ある程度は機能している。すなわち事前学習をしていない学生は低い評価になっている。

レポート課題については、返却したレポートのコメントに書かれたことを修正して再提出することで、1回目のレポートよりも修正したレポートのほうが良いレポートになっていることを確認している。したがって、知識と知識をつなげて考える力や論理的な文章作成技術が向上していると考えられる。

授業評価アンケートの結果からは、新しい知識や技能、専門的な考え方、発想を学ぶことができるという項目において高い評価を得ていることから、授業で得た知識を活用する能力が育成できていると考えられる。

なお、2023年度から人体の機能Ⅰおよび人体の機能Ⅱの難易度が高くなっている。これは健康や疾病・障害の状態に関する観察力や判断力を強化する授業にしたためである。授業の難易度が高くなったため、2023年度の人体の機能Ⅰの受講学生の約70%が「可(60～69点、到達目標を最低限度で満たしている)」であった。なお2023年度の人体の機能Ⅰの単位取得率は95%である。

5. 教育の改善

学生による授業評価アンケートや期末試験の結果、レポートの内容などを参考にして、毎年、授業は改善している。特に看護学部における人体の機能Ⅰと人体の機能Ⅱの授業では、臨床判断能力の基盤を強化することが求められているため、単に教科書に書かれた知識を覚えたことを確認するための定期試験ではなく、教科書の知識を用いて説明する論述形式の試験問題を多く取り入れる予定である。

生物学(生命の科学B)とヘルスサイエンス論に関しては、現在のアクティブラーニングの要素は取り入れているが、今以上にアクティブラーニングを増やすことを考えている。また、これらの授業においても事前事後学習を促すための課題や小テストを行うことを考えている。

また2023年度も試験的に行ってが、Slidoを用いて、無記名での確認テストや学生からの質問、アンケートを行うことで双方向型の授業にしていきたい。

6. 教育の目標

学生の潜在能力を引き出すことが教育の目的である。そのために、日々の事前事後学習を促す課題や定期試験を考えたい。特に看護学部における人体の機能Ⅰと人体の機能Ⅱの成績で、「良（70～79点、到達目標を概ね満たしている）の割合を増加させることを目的として、授業での指導方法の改善を行う。生物学（生命の科学B）とヘルスサイエンス論に関しては、今以上にアクティブラーニングを取り入れた授業を行う。全ての授業に関して、Slidoなどを活用して、今以上に双方向の授業ができるようにすることを目標とする。

【資料】

1. シラバス
2. 授業評価アンケート
3. レポート、ピア評価、定期試験の結果
4. 授業改善書